

## アラビア語北レヴァント・ホムス方言と日本語の

### 依頼行為の対照分析<sup>(1)</sup>

——ポライトネス標識を伴う命令法の例をもとに——

二ノ宮崇司（カザフ国立大学）

#### 要 旨

本稿はアラビア語北レヴァント・ホムス方言と日本語の依頼行為を対照分析することを目的とする。対照分析の結果、学習者が次の誤用を犯す可能性があることを指摘する。第1にホムス方言母語話者が日本語を習得する際、女性ホムス方言母語話者が親しい相手に男性専用の「Vてくれ」を用い、一方男性ホムス方言母語話者は女性日本語母語話者が使用する「Vてちょうだい、Vて」を使う可能性がある。第2に日本語母語話者がホムス方言を習得する際、親しい相手と知り合いの年上の人に使用可能なʔalla jxallik と親しい相手のみにはしか使用できないbhjatakを置き換え可能と考え、年上の人に対してもbhjatakを使い、なれなれしい態度をとる可能性がある。

キーワード：依頼、異文化間発話行為実現プロジェクト、命令法、ポライトネス標識

#### 1. はじめに

本稿は異文化間発話行為実現プロジェクト（Cross-Cultural Speech Act Research Project、以下CCSARP）という枠組みに基づき、依頼の発話行為を研究対象とする。Blum-Kulka et al. (1989) がCCSARPの中で規定する格下げ（downgraders）という項目に着目し、それらがアラビア語北レヴァント・ホムス方言<sup>(2)</sup>と日本語においてどのように記述されるのかを明らかにすることを筆者は目指している。格下げには、疑問、条件法、アスペクト、テンス、ポライトネス標識、控えめ表現、甘言などがある。これまで条件節（二ノ宮 2014）を記述したが、本稿ではポライトネス標識を取り扱う。

#### 2. 先行研究

##### 2.1. 異文化間発話行為実現プロジェクトにける命令法及びポライトネス標識

Blum-Kulka et al. (1989:11-12) はCCSARPの枠組みに基づき、依頼について次のように指摘している。「依頼はプレイベントな行動であり、話し手が聞き手に実施して欲しい行動を口頭あるいは非口頭という手段によって示す表現である。依頼はフェイスを脅かす行為（Brown & Levinson 1978）である。つまり聞き手は「依頼」を自分の行動の自由を侵害する行為であると解釈する。一方、話し手は「依頼」に際して、自分の要求を聞き手に押し付けられないように努める」と述べている。ただし本稿は依頼の定義をこれよりも限定する。具体的には、山岡 他（2010: 144）が挙げる「④参与者Bによる当該行為の実行は参与者Aに利益をもたらす」も依頼の定義に含める。なお、山岡 他（2010）の参与者Aは依頼者を、参与者Bは被依頼者を指す。Blum-Kulka et al. (1989:17-18) は依頼を主要行為部、注

意喚起部、補助部という3つに分けている。例えば、(1)のJohnという呼びかけが注意喚起部、依頼内容であるget me a beer, pleaseが主要行為部、依頼の理由となっているI'm terribly thirstyが補助部である。

(1) John, get me a beer, please. I'm terribly thirsty.

注意喚起部 主要行為部 補助部

Blum-Kulka et al. (1989: 18) は主要行為部を直接性という度合いから9つのストラテジーに分けている。その内訳は以下のとおりであるが、下の項目ほど直接性は低くなる。

- ・ 命令法による発語内効力の示唆 (Mood derivable) Leave me alone / Please move your car
- ・ 遂行動詞 (Performatives) I am asking you to move your car
- ・ 緩衝的遂行動詞 (Hedged performatives) I must to ask you to clean the kitchen right now
- ・ 義務の陳述 (Obligation statement) Madam you'll have to move your car
- ・ 願望の陳述 (Want statement) I'd like to borrow your notes for a little while
- ・ 提案 (Suggestory formulae) How about cleaning up the kitchen
- ・ 準備条件の質問 (Query preparatory) Can I borrow your notes?
- ・ 強いほのめかし (Strong hints) Will you be going home now? (Intent: getting a lift home)
- ・ 弱いほのめかし (Mild hints) You've been busy here, haven't you? (Intent: getting hearer to clean the kitchen)

本稿は命令法による発語内効力の示唆を取り扱う。Blum-Kulka et al. (1989: 278-279) は命令法による発語内効力の示唆を「発語行為の文法的な法は慣習的に依頼としての発語内効力を定める。その典型的な形は命令形」<sup>(3)</sup>と説明する。その例として、以下のようなものを挙げている。

(2) Leave me alone.

(3) Clean up the kitchen.

(4) Please move your car.

命令法による依頼は(2)、(3)のように命令法のみで表されるだけではない。(4)のように、命令法に対して、ポライトネス標識が付加される場合もある。Blum-Kulka et al. (1989: 285) はポライトネス標識を「協力的な行動を得ようとするために、依頼に対して付加される要素」<sup>(4)</sup>と説明する。そしてpleaseをその標識と考えている。

Blum-Kulka et al. (1989) はポライトネス標識を格下げという操作の1つと捉えているが、それは依頼の押し付ける力を軽減するというものである。格下げには、統語的格下げの疑問、準備条件の否定、接続法、条件法、アスペクト、テンス、条件節があり、語彙・句的格下げのポライトネス標識、控えめ表現、緩衝表現、主観化表現、語調を弱める表現、甘言、懇願表現がある。

一見、格下げはBrown & Levinson (1978: 134) のネガティブ・ポライトネス・ストラテジー<sup>(5)</sup>に対応するよう見える。しかしBlum-Kulka et al. (1989: 284) が格下げの1つとして挙げる甘言は「依頼によって話し手と聞き手の間の調和が脅かされるかもしれないが、その調和を増加、生成、あるいは回復するものである」と定義されている。甘言がBrown & Levinson (1978: 77, 108) のポジティブ・ポライトネス・ストラテジー<sup>(6)</sup>に対応していると

考えられるため、Blum-Kulka et al. (1989) による格下げはポジティブあるいはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを実現させるための操作であると定義しなおす。

## 2.2. 日本語の命令法及びポライトネス標識

Takahashi (1996: 220) は本稿の調査対象である「命令法による発語内効力の示唆」に着目し、その日本語の例として、V-shite kudasai (please VP) を挙げている。山岡 他 (2010: 144-167) は、配慮表現という枠組みを用いて、日本語の依頼表現を類型化しているが、命令系依頼表現の中に「Vてください」を分類している。山岡 他 (2010: 149-151) は命令系の枠組みの中で、以下の例を挙げている。

- (5) 皆さん、落ちついてください。汽車はすぐに止まります。
- (6) 先生どうかドレミファを教えてください。わたくしはついて歌いますから。
- (7) (子が母に) ねえママ、ドレミファを教えてください。
- (8) (夫が妻に) おい良子、オムライスの作り方を教えてくれ。
- (9) 私、三好晃子っていうの。荒井さん? よろしくね。ちょっと服着て来るから待っててちょうだい。

山岡 他 (2010: 150-151) によれば、(5) の「てください」は依頼者への利益を含んでいないため、依頼ではなく丁寧な命令であるという。一方、(6) はそれが含まれており、かつ依頼者が目下であるため、依頼としての役割を果たしているという。そして、敬語によって被依頼者を尊重しているため、消極的=ネガティブな配慮を示しているという。しかし小林 (2009: 136) によれば「～して下さい」は外の関係の無標な依頼表現であり、依頼相手に失礼にならないように頼む場合、それよりも丁寧でない依頼表現は存在しないという。また小林 (2009: 145) によれば、依頼者にとって得になる依頼であるものの、借りができない依頼の場合、無標の「～して下さい」を用いることもできるが、それ以上に丁寧な表現 (例えば「～してもらえませんか」) を使うことによって、相手により丁寧に依頼することが可能であるという。例えば、客が店員に「メニューを見せて下さい」と依頼することができるが、相手により配慮をして「メニューを見せてもらえませんか」と言うこともできる (小林 2009: 137)。小林 (2009) による「V てください」が無標であるという立場を考慮すれば、「V てください」をポライトネス標識と捉えることには問題があるだろう。

また山岡 他 (2010: 150-151) によれば、(7) の「V て」、(8) の「V てくれ」、(9) の「V てちょうだい」の被依頼者は遠慮の要らない親しい人であるという。さらに「V てくれ」は話し言葉においてほぼ男性専用で、女性は「V て、V てちょうだい」を用いるという。これら3つの標識を Brown & Levinson (1978) のポライトネス・ストラテジーに照らし合わせると、それらはポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4 の「仲間内であることを示す標識を用いよ」(Brown & Levinson 1978: 107-112) に相当するポライトネス標識であると考えられる。このストラテジー4として、Brown & Levinson (1978: 107) は仲間内の呼びかけ表現、仲間言葉や方言、ジャーゴンやスラング、言葉の省略を挙げている。「V て」は言葉の省略に、「V てくれ、V てちょうだい」は仲間言葉の一形態に相当すると考えられる。

### 2.3. アラビア語の命令法及びポライトネス標識

Alaoui (2011: 12) はモロッコ方言の命令法に言及している。それによれば、モロッコ方言の命令法は英語の場合と同様、話し手による失礼さのサインを示すという。しかし、llah yxellik 「神が貴方を長生きさせるように」というポライトネス標識を命令法に付加することによって、依頼内容は和らげられるという。以下の (10) が命令法のみ例、(11) はそれにポライトネス標識が付加された例である。

(10) Štenī atay 「お茶を私にください」

(11) Štenī wahd lkas datay, llah yxellik 「お茶を一杯私にください。神が貴方を長生きさせるように」

Alaoui (2011: 12-13) はモロッコ方言において、llah yxellik 以外に、llah yrđi šlik 「神が貴方を祝福する」、šafak 「神が貴方に健康を与えますように」というポライトネス標識の存在も指摘している。なお Aldhulaee (2011: 29) はイラク方言にもポライトネス標識が存在すると指摘する。モロッコ方言の場合、ポライトネス標識は命令形に付加されていた。つまり動詞に現れる主語と一致標識は2人称であった。しかし、以下のイラク方言において、動詞の一致標識は1人称となっている。

(12) areed kubain gahwa min fathlak

「私は2杯のコーヒーが欲しいです。貴方の恩恵から」

### 2.4. 先行研究の問題点

2.1 節でポライトネス標識の定義を確認した際、それは「付加される要素」ということであった。しかしその定義を日本語にあてはめると、「Vて」をポライトネス標識と捉えることができない。Blum-Kulka et al. (1989) の考えに従えば、「Vて」を基底として、「くれ」「ください」「ちょうだい」がそれに付加される要素となる。筆者の格下げの定義、及び「Vて」がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの標識であることを踏まえれば、Bulm-Kulka et al. (1989) のポライトネス標識の定義において、「付加」を明言する必要はない。現時点では、ポライトネス標識に対して、ポライトネス・ストラテジーを実現させる要素であるというように幅広く捉える。

## 3. ホムス方言の調査方法

シリアのホムス市で生まれ、言語形成期をホムス市で過ごした NA 氏 (女性) からホムス方言のデータを収集した。調査に際し、依頼文が文法的に妥当か否か、またそれを被依頼者に適切に使用できるかという点に注意して、NA 氏に質問を行った。

## 4. ホムス方言の調査結果と考察

命令法による表現として、以下のものを確認することができた。

(13) šī-ni                      l-qalam      law      samaht

与える(命単男)-私に      その-ペン      もし      許す(完2単男)

「(教員が学生に) ペンをとってください。もしあなたが許したら」

- (14) ʕī-ni                      l-qāʔime              min   faɖl-ak  
 与える(命単男)-私に    その-メニュー    から   恩恵-貴方の  
 「(客が店員に) メニューを与えてください。貴方の恩恵から」
- (15) b-hjāt-ak              naɖɖif                      l-ɣurfe  
 で-生命-貴方の    掃除する(命単男)    その-部屋  
 「(友達に) あなたの生命で、部屋を掃除して」
- (16) ʔalla    jxalli-ki                                      zabbɖi                      l-matbax  
 神    長生きさせる(接3単男)-貴女を    掃除する(命単女)    その-キッチン  
 šuwaj,    b-ima    inn-ek    xallasti  
 少し    で-何か    事-貴女の    汚す(完2単女)  
 「(友達に) 神が貴女を長生きさせるよう、貴女が汚したので、その部屋を少し掃除して」
- (17) ʔalla    jxalli-k                                      naɖɖif                      l-ɣurfe  
 神    長生きさせる(接3単男)-貴方を    掃除する(命単男)    その-部屋  
 「(若い人が年上のお手伝いの人に) 神が貴方を長生きさせるよう、部屋を掃除して」
- (18) ʕammo    ʔalla    jxalli-k                                      izā    fī    maʒāl  
 おじさん    神    長生きさせる(接3単男)-貴方を    もし    で    範囲  
 ʔil                      l-i                      kif    fī-ni    rūh                      l-maħaṭṭa  
 言う(命単男) に-私の    方法    で-私の    行くこと    その-駅  
 「(若い人が年上の知り合いの人に) おじさん！神が貴方を長生きさせるよう、もしできれば、私が駅に行く方法を私に言って」

上の6つの例は命令法にポライトネス標識が加わった例である。ポライトネス標識としては(13)の *law samaht*、(14)の *min faɖlak*、(15)の *bhjātak*、(16)の *ʔalla jxalliki*、(17)、(18)の *ʔalla jxallik* を挙げた。(16)と(17)、(18)はともに「神があなたを長生きさせるよう」という意味ではあるものの、(16)の被依頼者は女性、(17)、(18)のそれは男性である。なお *bhjātak* の被依頼者は男性であるが、女性の場合 *bhjātek* となる。

NA氏によれば、(13)、(14)は親しくない被依頼者に対して、依頼の押し付ける力を和らげるために使用できるが、「*bhjāta/ek*+命令法」は家族や(15)のように友達といった親しい間柄の人にしか使用できないという。一方「*ʔalla jxallik(i)*+命令法」は家族や友達(16)などの親しい人に使えるだけでなく、(17)、(18)のように年上の人にも用いることができるという<sup>(7)</sup>。(17)の被依頼者は仕事として依頼内容を行う。また(18)の依頼内容は後述する(20)に比べて、負担が少ない。

またNA氏は *ʔalla jxallik(i)* は命令法を伴った場合だけでなく、(19)の「*maʕleš*+2人称の接続法」(「あなたがVすることを気にしないでしょうか」)、(20)の「*maʕleš*+1人称の接続法」(「私がVすることを気にしないでしょうか」)のような要素を伴うことも可能であるという。

- (19) ʕammo    ʔalla    jxalli-k                                      maʕleš                      ʔizā    fī    maʒāl  
 おじさん    神    長生きさせる(接3単男)-貴方を    気にしない    もし    で    範囲

til l-i kīf fīni rūh l-mahaṭṭa

言う(接 2 単男) に-私の 方法 できる(1 単) 行くこと その-駅

「(若い人が面識のない年上の人に) おじさん! 神が貴方を長生きさせるよう、もしできれば、私が駅に行く方法を私に言うことを気にしないでしょうか」

(20) ṣammo ʔalla jxalli-k mubajl-i ṣaṭlān wo

おじさん 神 長生きさせる(接 3 単男)-貴方を モバイル-私の 壊れた そして

lazem iṣmol mukālame, ḍarūri ktīr, maṣleš

なければならない する(接 1 単) 電話 必要である ととても 気にしない

istaṣīr mubajl-ak ʔizā mā fī-ha izṣāž

借りる(接 1 単) モバイル-貴方の もし ない で-そのの 邪魔

「(若い人が年上の知り合いの人に) おじさん! 神が貴方を長生きさせるよう、私のモバイルが壊れましたが、私は電話をしなければなりませんし、それがとても必要でして、もしお邪魔でなければ、貴方のモバイルを私が借りることを気にしないでしょうか」

(19) の内容は (18) とほぼ同じであるものの、被依頼者が全く面識のない年上である。NA 氏によれば、面識のない年上に依頼をする場合、「ʔalla jxallik(i)+命令法」は使いにくく、それ以上に柔らかく頼むことができる (19) のような表現を使用した方がよいという。そして (20) は (18) と同じく若い人が知り合いの年上の人に依頼をする場面である。NA 氏によれば、被依頼者に大きな借りができるような場合、「ʔalla jxallik(i)+命令法」は使用しにくく、(20) のような表現を用いる方が場面に適するという。なお友達に使用できる (16) は ʔalla jxalliki の代わりに、bhjātek を用いることが可能であるとも述べている。しかし (17)、(18)、(19)、(20) において bhjātak を用いると、年上の被依頼者になれなれしい態度をとってしまうという。そのため、ʔalla jxallik(i) と bhjāta/ek は常に置き換えることができないと考えられる。

## 5. 対照分析

まず、ホムス方言と日本語におけるポライトネス標識を伴った命令法の共通点及び相違点を示す。共通点は親しい相手へのポジティブなポライトネス標識がホムス方言と日本語に存在するという点である。日本語では、「V てくれ、V て、V てちょうだい」が、ホムス方言では bhjāta/ek と ʔalla jxallik(i) がそれに相当すると考えられる。一方、相違点は親しい相手に依頼する場合、日本語では女性が用いる標識 (V て、V てちょうだい) と男性が使う標識 (V てくれ) の形が異なるが、ホムス方言ではそのような区別はないという点である。第 2 の相違点は、日本語のポライトネス標識である「V てくれ、V て、V てちょうだい」は常に親しい相手にしか使用できないが、ホムス方言のポライトネス標識である ʔalla jxallik(i) は親しい相手にだけでなく、知り合いの年上の人にも使える。

以上を踏まえ、学習者による誤用の可能性を指摘する。上述の第 1 の相違点で述べたとおり、日本語において親しい相手に依頼をする場合、依頼者が男性か女性かによってその形態は異なるが、ホムス方言ではそのような区別はない。ホムス方言母語話者が日本語を習得する過程において、次の問題が発生する可能性がある。それは日本語の話し言葉にお

いて、女性のホムス方言母語話者が誤って「V てくれ」を使用し、逆に男性話者が「V てちょうだい、V て」を用いる可能性があるというものである。次に、日本語母語話者がホムス方言を習得する際に起こりうる誤用を指摘する。上の第2の相違点で指摘したとおり、ʔalla jxallik(i) は親しい相手に使用できるだけでなく、年上の人にも使用できる。また bhjāta/ek は家族や友達といった親しい相手にしか使用できないということを第4節において指摘した。これは bhjāta/ek の使用領域とʔalla jxallik(i) のそれが部分的にしか重なっていないことを示しているといえる。以上から日本語母語話者がホムス方言を習得する際、bhjāta/ek とʔalla jxallik(i) を常に置き換え可能と考えると、目上の被依頼者に「bhjāta/ek +命令法」を用い、その人物になれなれしい態度をとってしまう危険性がある。

## 6. おわりに

本稿ではホムス方言並びに日本語におけるポライトネス標識を伴った命令法を対照分析することを目的とした。2.2節で日本語の命令法及びポライトネス標識を、4節でホムス方言のそれを確認した。

対照分析の結論として、まずホムス方言母語話者が日本語を習得する際、女性の話者が日本語の話し言葉において「V てくれ」を、男性話者が「V てちょうだい、V て」を誤って使用する可能性がある。もう1点は日本語母語話者がホムス方言の習得過程において、bhjāta/ek とʔalla yxallik(i) の使用領域が部分的にしか重なっていないことを踏まえなければ、年上の被依頼者に「bhjāta/ek+命令法」を使用し、なれなれしい態度をとる可能性がある。

筆者はこれまでにホムス方言と日本語の依頼表現における対照分析を行ってきた。特に、Blum-Kulka et al. (1989) が取り上げる格下げに着目してきた。これまで、条件節とポライトネス標識を取り扱ったが、今後はそれ以外の項目も記述し、その対照分析を施したい。

## 注

- (1) アラビア語は大きく書き言葉の正則語、話し言葉の民衆語に分かれる。民衆語は地域ごとに様々な種類がある。正則語はアラブ世界に共通の言語であり、アラブ世界の新聞、ラジオ、テレビなどで使用されるが、民衆語はそれ以外の日常的な場面で使用される。エジプトにはエジプトの民衆語、シリアにはシリアの民衆語があり、民衆語は地域的な違いを見せている。通常、民衆語が文字に書かれることはない。ホムス方言は民衆語の1つである。ホムス方言のデータに現われる ʔ は [ʔ]、ɣ は [ɣ]、s は [sʰ]、t は [tʰ]、z は [ðʰ]、d は [dʰ] である。母音の上の ː は長母音を示す。本稿の略語は次の通りである。1=1 人称、2=2 人称、3=3 人称、単=単数、男=男性、女=女性、完=完了、接=接続法、命=命令法、V=動詞。
- (2) 本稿ではアラビア語としてホムス方言、先行研究のモロッコ方言、イラク方言を取り上げる。それら3つの言語の特徴として、動詞に主語との一致標識が存在する点を挙げる。すなわち、文に主語が明示されなくとも、動詞の形を見ればその主語が明らかとなる。
- (3) 原文は次のようになっている。‘The grammatical mood of the locution conventionally determines its illocutionary force as a Request. The prototypical form is the imperative’
- (4) 原文は ‘An optional element added to a request to bid for cooperative behavior’ となっている。
- (5) ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーについて、Brown & Levinson (1978) は他者に邪魔をされたくないというネガティブ・フェイスを満たすために、フェイスを脅かす行為が発生させてしまう押し付けの力を軽減するものであると説明する。

- (6) ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに関して、Brown & Levinson (1978) は他者に好かれたいというポジティブ・フェイスを満たすために、相手に親近感を持つようとするものであると述べている。
- (7) NA 氏によれば、通常、命令法単体は上司や教師といった目上の者から目下の者に対して使用されるという。また友人同士でも命令法の単体は使用可能であるが、何らかの要素をつけるのが自然であるという。

## 参考文献

- 小林亜希子 (2009) 「国文法を利用した英文法教育の試み (2) : please の使い方」『島根大学法文学部紀要言語文化学術編』127-157
- 二ノ宮崇司 (2014) 「アラビア語北レヴァント・ホムス方言と日本語の条件節を伴う依頼表現の対照分析」二ノ宮崇司・小野正樹・高橋未来 (編)『第 11 回国際学術会議 文明のクロスロード : 言語・文化・社会の様相』18-21
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010)『コミュニケーションと配慮表現 : 日本語語用論入門』明治書院
- Alaoui, Sakina M. (2011) Politeness principle: A comparative study of English and Moroccan Arabic requests, offers and thanks. *European Journal of Social Sciences* 20 (1) 7-15
- Aldhulaee, Mohammed T. (2011) Request mitigating devices in Australian English and Iraq Arabic: A comparative study. Unpublished master thesis. Deakin University.
- Blum-Kulka, Shoshana, Juliane House and Gabriele Kasper (eds.) (1989) *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*, Norwood, N.J.: Ablex
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1978) Universals in language usage: Politeness phenomena. In: Esther N. Goody (ed.) *Questions and politeness: Strategies in social interaction*, Cambridge: Cambridge University Press, 56-311
- Takahashi, Satomi (1996) Pragmatic transferability. *Studies in Second Language Acquisition* 18, 189-223

(二ノ宮崇司、カザフ国立大学上級講師、s0430062.ninomiya@gmail.com)